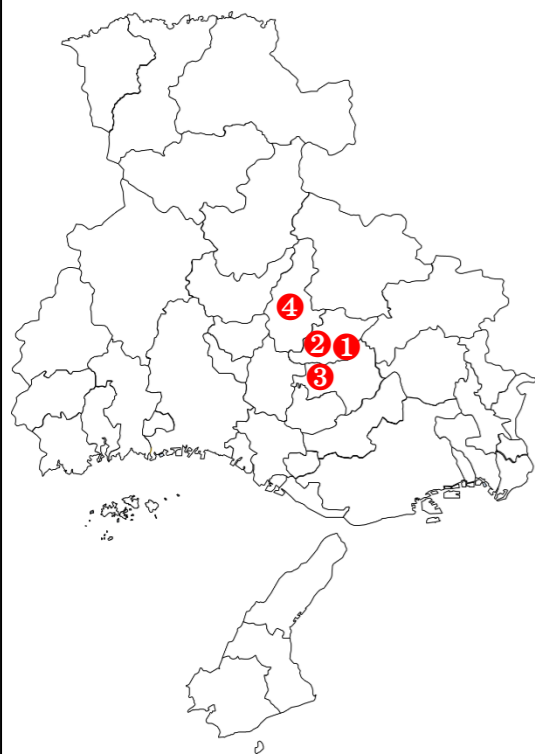


自然光を採り入れるためにつくられた「ノコギリの刃」のような形状の屋根が連なる風景は、織物で栄えた地域の特徴的景観である。産業の衰退とともに展示・販売施設に転用されたものもあるが、今も尚まちなかに残る歴史的資産として、地域の歴史を物語る。



【登録する建造物】



① 播州織工房館（西脇市）



② 遠孫織布（西脇市）



③ 神結酒造（加東市）



④ 橋本裕司織布（多可町中区）

【ノコギリ屋根について】

ノコギリ屋根は近代工場の象徴ともいえる存在で、産業革命当時の英国で、考案された屋根構造である。

織物工場において、採光は、生地の状態や色合いを見るために、直射日光を避けた、安定した照度の明かりが必要で、北側に向けた窓を設け、1日を通して均一の明かりを採り入れようとしていた。

また、屋根に窓を設けることで、広い作業場が確保できる利点があったこともあり、ノコギリの刃の形状の屋根に至った。

広い面積に均等に明かりを採り込むことができる「ノコギリ屋根」、織物産業で繁栄したまちなみを象徴するものである。

【工場といえば・・・】

昔の地図では、工場のあるところには、三角屋根と煙突が描かれていたといわれている。現在でも、工場のアイコンといえば同様の形状を示したものがよく使われており、ノコギリ屋根は、工場の象徴とも言える。

【織物工場が多い地域は・・・】

西脇市や多可町などは、加古川、杉原川、野間川が流れる地域で、染色に重要な水資源に恵まれており、織物産業に適している地域である。

各建造物について

- ① **【播州織工房館（西脇市）】**
 明治35年頃に建てられた織物工場を播州織製品の販売・展示を行うアンテナショップとして活用。
 焼板を巡らせた外壁や木の格子窓が特徴的。
 手織り体験など、体験型施設として播州織の魅力を発信する。
- ② **【遠孫織布（西脇市）】**
 昭和27年頃ジャガード織物（播州織の一種）の工場として建てられ、現在も稼働中。併設ショールームにて、オリジナル生地的一般販売も行う。外観と併せて織物産業を身近に感じることが可能。
- ③ **【神結酒造（加東市）】**
 戦後もまもなく織物工場として建設され、現在は隣接する酒造の倉庫や冷蔵庫として活用。新酒の時期には酒造工程の展示会場として活用。
- ④ **【橋本裕司織布（多可町中区）】**
 昭和39年頃織物工場として建てられ、現在も稼働中。
 「播州織」のブランド Banshu-ori Next Japan として国内外に向けた同製品の魅力発信・製造販売に精力的に活動している。

のこぎり屋根の現状を伝える記事 「のこぎり屋根」の大部分、堤防工事で解体へ



神結酒造の「のこぎり屋根」の建物。全長約50メートル。このうち3分の2が解体される。全国でも珍しい光景で、関東から愛好家が訪ねて来ることもあったという



建物の中。漏れる光が往時の面影を語るようだ
 残ったのこぎり屋根の建物は、倉庫や冷蔵庫として活用する

かつて播州織の工場を象徴した「のこぎり屋根」が消えようとしている。神結酒造（兵庫県加東市下滝野）では織物工場で使われていた建物を20年前から、社屋兼倉庫として利用してきた。だが6月、そばを流れる加古川に堤防を築くため大部分が解体される。地域の記憶を伝える屋根。その姿が変わる前にレンズを向けた。

のこぎり状の屋根は光を取り入れるため、停電が多かった当時の知恵と工夫から生まれたとされる。

旧滝野町では播州織の最盛期だった昭和30年ごろ、50以上の工場が操業、のこぎり屋根も各地にあったという。その後、安価な外国製などに押され、現在、加東市内では3社ほど。往時の面影を残す屋根も今は数えるほどしかない。

神結酒造の「のこぎり」は、戦後すぐに建てられたかつての織物工場。屋内は手直ししたが、外観はほぼ当時のままで20年前から使用する。

滝野地域では2004年の台風23号で加古川が氾濫し水害に見舞われた。国土交通省は約2・7キロの堤防を築く工事を17年から開始。周辺では家屋の立ち退きが必要で、同酒造の建物も3分の2は解体される。「地域が生活していくためには必要な工事」と同酒造専務の長谷川妙子さん。一方で昔の光景が失われ、寂しさを募らせる住民もいる。

解体を免れる建物は窓をふさぐなどして、ほぼ現状のまま倉庫として使う。長谷川さんは言う。「これからも皆さんの心に残る酒蔵でいたい。工事を出発点とし、残った建物とともに、新しい姿を次代へ引き継いでいきます」神戸新聞（R3.4.19）より